スペイン史研究文献（一）

西澤龍生
近藤仁之

【要約】 スペイン史学界の現況、並びに研究書誌につき一文をものすやう編輯子の依頼をうけたのは、昨年暮、筆者のマドリー滞在中であつた。僅か一年そこそこの滞在であつた上、明けて新年早々は帰国の旅に発つ身とあつて、準備の暇もなく、取敢ずなほ年余に亙り滞在される近藤仁之氏（南山大学）に協力を仰いで快諾をえたのであつた。ここに稿を起すにあたつて最初にお断りしておきたいことは、この歴史的な「大国」の史学界につき紹介の筆を染めるのに筆者がいまだその任にたへぬ者であること、しかしならばこそまたなほのこと、拙文に盛られた以上に当の対象が遥かに深い奥行と大きな「問題」を含むことを御賢察いただきたいといふことである。従つて本篇の主たる内容は、生々しい現地報告もまじへた近藤氏の以下続篇に譲ることとし、ここでは僅かにその露払ひの役割を演じて当面の責を果すこととしたい。（西澤記）

史林　五三巻一号　一九七〇年一月

一　沿　革

マドリーはプラド美術館にほど遠からぬカルボ・ソテーロ街（パセオ）に面して、国立図書館 Biblioteca nacional 入口上層の破風と列柱がやや黝んだ大理石の落ちついた風情をのぞかせてゐる。その下に裳裾のやうにひろがつた階（きざはし）の中段左右には椅子に身を凭せた巨像が双つ、賢王アルフォンソ十世とセビーリャのインドロがそれである。そこから更に登りつめると、入口を守護するやうに四つの立像、向つて左よりたしかネブリーハ、セルバンテス、ローペ・デ・ベーガ、ルイス・ビーベスだつたかと記憶する。中世から黄金の世紀にかけてのあの綺羅星が、スペイン人の胸の底に如何なる星座（コンステラシオン）をかたちづくつてゐるのかを垣間見るやうで興味ぶかいが、さて入口をくぐり、仄暗い玄関を渡つて、いよいよ奥なる閲覧室にむかはうとするとき、不図見上げる台座の上に再び椅子に深々と坐し黙然として沈思する巨人の影がある。マルセリーノ・メネンデス・イ・ペラーヨ Marcelino Menéndez y Pelayo,

1856–1912. スペイン人をして自身の過去と思想とを価値ある認識の対象として自覚せしめた覚醒者にこそほかならぬことは、断るまでもないと思ふが、当時、前代からひきつづくフランス化afrancesamiento の洪水に殆んど押し流されんばかりであつたこの国の学問の出発にとり、スペイン人のスペイン史、またスペイン哲学といふ今となつては自明としか言ひやうのないかかる前提の確立が、いつたい何を意味してゐたかを、はしなくもこの像の位置は物語つてゐるのではないであらうか。小文が、何はともあれ、スペイン史学のそもそもから説き起さうとして、結局はこの先覚の偉人から出発せざるをえないのも、つまりはそこに象徴される学問史上決定的な意味合ひにおいてのことでしかないわけである。

ところでかかる立場と別に、文字通りのそもそもから説き起してゐるスペイン史学史も、極く僅かながら、なくはない。B. Sánchez Alonso,《Historia de la Historiografía española》, Madrid 1947, (segunda edición revisada y añadida). Tomo I, II, III が恐らくは、その唯一の例であらう。第一巻はギリシア・ラテンの総論からはじまつて《Crónica de Ocampo》の公刊(一五四三年)にいたるまで。第二巻はこのオカムポから Mariana (1543–92) や Moncada (1592–1623) を経て Solís (1623–84) まで。第三巻はソリースから Ferreras (1682–1728), Masdeu (1728–81)を経て一八〇八年までを取り扱つてゐる。後述の最高学術会議(C.S.I.C.)の刊行で、実際入手しうるものは、現在ではうち第一巻のみ。が、たとひ全巻を揃へえたとしても、いづれにせよ、肝腎の十九世紀以降は欠落してゐる。結局、同じサンチェス・アロンソが同じく C. S. I. C. から出してゐるビブリオグラフィア、《Fuentes de la Historia hispanoamericana》, Madrid 1952 〔tercera edición〕, Vol. I, II, III. が代りにもならぬ代りをなしてゐるに過ぎぬが、これとても時代別、項目別による分類そのものは結構として、一九一九年の初版より、再版、Apéndice の段階を経てこの第三版にいたる間に通し番号のやりかへで混乱がなくもないから必ずしも検索に便とは言へない。

余談になつたが、メネンデス・イ・ペラーヨの草創としての重要性は、今日でも——たとへば王政復古(レスタウラシオン)の理論づけにすらおけるがごとく①——国民の歴史的自覚に憑へようとする際には先づ以てその名が引き合ひに出されるところからも窺はれよう。すなはち、当時スペイン的学問の価値をめぐつて諸家との間に華々しく展開した論戦の数々、また《Historia de los Heterodoxos》をはじめとするその厖大な作品群の劃期的な業績はさておくとして、この碩学の名を不朽のものたらしめたのは、やはり一つの気運の醸

成――多くのすぐれた追随者を生み出したことであつて、次に挙げるそのあらましの人名録に一瞥をくれるだけでも、かれの何者たるかは既に思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。

たとへば先づイノホーサ Eduardo de Hinojosa, 1852–1919――この人は未完の《Historia general del Derecho》や《El elemento germánico en el Derecho español》(1908);《El régimen señorial en Cataluña durante la Edad Media》(1905)で令名かくれもないが――その門からはスペイン法史学派が育くまれて、「歴史研究センター」《Centro de Estudios Históricos》を母胎に、やがて『スペイン法史年報』《Anuario de Historia del Derecho español》1924- を舞台として、Galo Sánchez, Ramos Lascertales, Claudio Sánchez Albornoz, Luis García Valdeavellano を筆頭とするそのほか Ramón Riaza, Alfonso García Gallo, Ramón Prieto Bances, Manuel Torres López, Padre José López Ortiz, O. S. A., Sánchez Bella, Rafael Gibert, Juan Beneyto, José Maldonado など錚々たる先達の群を輩出してゐる。またオビエド大学の学統から出たアルタミーラ Rafael Altamira y Crevea, 1866–1951 は、これもスペイン法制の研究から出発しながら、その《Historia de España y de la civilización española》(1900–1911), 4 vols. は在来の政治史的偏重に対し文化史の境地を打ち出して、或ひはスペインのブルクハルトとも称しえようか。新大陸におけるスペイン文化の歴史について研究の先鞭をつけたことと共に、その影響力はひろくあらゆる世代に及んだのであつた。この点それにまさるとも劣らないいま一つの名はバリェステーロス Antonio Ballesteros Beretta, 1880–1949,[2] この場合は政治史に傾くが、やはり《relaciones hispanoamericanas》の研鑽に同じく鼓吹者としての役を演じて、《Historia de España y su influencia en la historia universal》(1918–1940) をはじめとするその労作は、アルタミーラのそれとともに、いはゆる《leyenda negra》の霧を払つてスペイン史像を知らしめるのに卓効があつたばかりか、後進の育成によりこの国現代の歴史学の発展に一つの土壌を用意することとなつたのである。

ほかに感化力の大きかつた学匠としては更に、中世史家イバルラ Eduardo Ibarra y Rodríguez, 現代史家でマドリー大学の総長にも任じたサバーラ Pío Zabala y Lera, また《Documentos sobre relaciones internacionales de los Reyes Católicos》などで名高いデ・ラ・トルレ Antonio de la Torre 等々逸しえぬ名もいくつかあるが、ここでは略す。やはりメネンデス・イ・ペラーヨの門弟として断然他を圧する者はと言へば、どうしてもラ

モン・メネンデス・ピダール Ramón Menéndez Pidal, 1869-1968 で、いま一人の高弟ボニッリャ Adolfo Bonilla y San Martin, 1856-1912 が法学・哲学・言語学・文学で師の遺鉢を継ぐとすれば、これは言語学・文献学・歴史学の面で出藍の誉を擅にした存在と言つてよく、剰へ藉すに百歳の長寿を以てして、一昨年冬その生涯をとじるまで、足かけ四〇年にも亙り《Real Academia Española de la Lengua》(一七一三年創立)会長の座にあつたことは、この天才を中心に学界が一つの輝かしい時期を劃しえたといふことであつて、たとへばその監修で一九四八年にはじめられ、今なほ続行してゐるあの《Historia de España》の(Espasa-Calpe 社刊)大事業③のごとき、史学界にとつての宿願の達成を空前の規模において可能なしらめたのであつた。正に奇蹟としか言ひやうがないが、昨年のマドリーは、目抜のホセ・アントニオ街に面して、エスパサ・カルペ社のショーウィンドウに、これら大冊の《Historia de España》既刊分や、同社刊《Colección Austral》所収のピダールの諸著二十数篇がところ狭しと並べられたし、『アテネオ』④などの顕彰、また諸雑誌の特輯も行なはれた模様である。尤も殆んど超人的と言ふべきその業績の一々につき、ここで論ずる余裕は無論のことない。特にかれの場合、史学に分野を限つてといふことになつても、《Poema del Cid》の研究にその第一歩を踏み出してこのかた、史学と文学研究とが分ちがたく結び合つてゐて、結局その労作の大半が何等かの意味で論及の対象になつて来ざるをえないだらうから。が、強ひて範囲を限るとするなら、その主たる題目は左の如くにでもなるであらうか。《Primera Crónica General de España》1906, 2 vols.; 《La España del Cid》, 1921; 《Historia de España》の諸巻に寄せた序文として《Los españoles en la historia》, 《Cimas y depressiones en la curva de su vida y política》, 《El imperio romano y su provincia》, 《Universalismo y nacionalismo》(la España de los godos), 《Los reinos de la Reconquista》, 《Un Imperio de paz cristiana》(Carlos V), 《El compromiso de Caspe》. うち《Los españoles……》は《Colección Austral》にも収められてゐるが、この叢書は、そのほか《Idea imperial de Carlos V》, 《Miscelánea histórico-literaria》, 《Los Leyes Católicos y otros estudios》, 《Los godos y la epopeya española》, 《España, eslabón entre la Cristianidad y el Islam》, 《El Padre Las Casas y Vitoria, con otros temas de los siglos XVI y XVII》といつた諸篇を含んで、碩学の史眼を比較的容易にうかがひ得る。

ところで当然のことながらピダールの門から極めて多彩な人脈

の形成がなされることとは想像に難くない。そしてこれまた当然のことながら、その焦点がフィロロギアにあつて、一九一四年創刊の《Revista de Filología Española》(＝RFE) を発表機関に、同年委嘱された「歴史研究センター」文献学(フィロロヒア)部門を舞台にして学派がかたちづくられて行つたことも周知であらう。いまその主な顔ぶれを拾つただけでもアメリコ・カストロ Américo Castro 1885- ――長く中南米、更に北米に亡命してゐたが、つい最近帰国した――をはじめとして Tomás Navarro Tomás; García de Diego; G. A. Solalinde. ついでダマソ・アロンソ Dámaso Alonso ほか Amado Alonso; Rafadl Lapesa; Samuel Gili Gaya; Aurelio M. Espinosa 等々、またつづいて古典学者 Antonio Tovar とか Manuel Alvar..... といつた面々や、一方《Bulleti de dialectologia Catalana》に拠る A. Griera; Badia Margarit 等カタルーニャ派といつた風にまことに多士済々である。しかも中南米は申すに及ばず、合衆国のあちこちにまでその学風が浸透してゐるといふ、それこそ太西洋を股にかけての裾野のひろさは一驚に値するが、ただこの場合も問題を専ら史学なる枠内に引き戻すなら、一応指を屈しうるのは、やはりアメリコ・カストロを措いてはないであらう。[5] すなはち、一九四八年、「歴史におけるスペイン」《España en su historia》と題して世に問ふたかれの大著が、前述の――同じく亡命の身であつた――サンチェス・アルボルノス Claudio Sanchez-Albornoz y Menduiña, 1893- の浩翰の書「歴史の謎スペイン」《España, un enigma histórico》(Buenos Aires 1962) により痛烈な反論をうけ、そこでカストロも「スペインの歴史的現実」《Realidad histórica de España》と改題増補して真向から反論を受けて立つたその間の丁々発止が、戦後の史学界最大のトピックとして、世の耳目を集め、思はぬかたちで斯界に刺戟を与へることにさへなつたからである。論争の内容につきここで立ち入ることは到底できない。が、要するに、カストロが、スペインをスペインたらしめたものは何かと問ふて、レコンキスタ八百年――イスラームやユダヤとの死闘と共存が織り成すあの時代を決定的な成因として取り出して来るのに対して、片やサンチェス・アルボルノスが、むしろその底に流れるスペインとしての一貫性、不易のその本質を主張して譲らない、さうした論点の喰ひ違ひが、論争の常として、極端なまでに誇張されてぶつかつた結果がこれだつたと思へるのである。蓋し法制史学派から出たオーソドックスな中世史家《Estudios sobre las Instituciones medievales españolas》(México 1965) ;《La España musulmana》(Bnenos Aires 1946) 2. vols. でも名声嘖々たるサンチェス・アルボルノスと、メネンデス・ピダールの門から出

た言語学者にして文学史家、セルバンテスやローペ・デ・ベーガの研究では揺がぬ権威を誇るアメリコ・カストロと、この両雄が、スペインとは何ぞやをめぐり四つに組んでわたり合つたといふことほど興味をそそるものはないが、スペイン本国史学界の一般的な傾向として、前者に加担する向きが多いといふことだけはつけ加へておかう。

メデンネス・ペラーヨから説き起して曲りなりにもここに来るまで、常に心の片隅に蟠（わだかま）つてゐた問題がある。「九八年の世代」の問題が実はそれ。言ふまでもなく、ウナムーノを筆頭に、アソリーン、ピオ・バローハ、マエストゥ、くだつては更にオルテガにいたるまで、覚醒せる知識層の旗手として躍り出たこれら輝かしい学者・文人の群がひろく国民的自覚に愬へたあのひたむきな運動のことであるが、それと歴史家との関はりは果して如何といふ問題があつたのである。一八九八年といへば、偶々メネンデス・イ・ペラーヨの国立図書館長就任の年、またその翌年はメネンデス・ピダールがマドリー大学にロマニスティク教授の椅子を得てゐる。いづれもアカデミックな途を歩みながら、その途は、あの澎湃たる運動と常に並行し、時には交錯してすすんで行つたといふことになる。その関係をたとへばアソリーンは、「九八年の世代」の運動が直接的にはM・ペラーヨの問題ではないのだといふ言ひ方で表現したし、またメネンデス・ピダールも、ウナムーノへのその敬愛は終生悖らなかつたにもかかはらず、自身が「九八年の世代」とされることには、おだやかながら首を横にふつて答へたといふ。そこに歴史家、或ひはひろく学者の微妙な立場がうかがへて頷けなくもないのであるが、ただ、にもかかはらず、学界の先覚者によるスペイン史の復興・蘇生が、精神の鼓吹者達にたえず生気を送り込んだことは、まぎれもない事実であつて、言ひ方を変へるなら、専ら思想的ないはゆる「九八年の世代」とは別の、もつと実証的でアカデミックな今一つの「九八年の世代」があつたのだといふことにもならうか。無論一方ではビセンス・ビーベス⑥の意見のごとく、さうした世代の深刻なる危機意識は新しい時代の風にいきなり曝された後進的なカスティーリャに特有の観念過剰で、すすんだ市民社会たるカタルーニャの楽天性と歴史主義には無縁のものでしかないとも言へるが、そのやうな見方も含めて、しかしスペイン全体に一つの「歴史主義的（イストリシスタ）」な世代が興起したことは事実であつて、観念へのあの昂揚と史実へのこの沈潜とは、相互に何ら直接的脈絡はないにもかかはらず、実は同じ楯の両面だつたと言つてもそれほど的外れではなかつたのである。スペインとは何ぞやをめぐる実証史家の論争に、わけても興味をかき立てられる所以であるが、そのやうな世代の興起を可能なら

しめた根柢として、われわれは、この国独自の《erudición》の伝統といつたものにも、やはり一応の考慮を払つておく必要があるであらう。一部研究書誌への手引も兼ねて、次にそのあらましを摘記することとしたい。

二　史　料

「修道院めぐりをして古文書を漁つて来給へ。」某教授の事ある毎の口癖だといふ。別に冗談ではない。教会の奥深く、僧房の隅、祭具室の物陰などには、無雑作に束となつた manuscritos が、探せばごろごろ転がつてゐるやうなことだつてある……かう教へてくれたのは、彼地で同学の友であつた。不勉強な筆者が、これを己れの体験談として語りえないのは残念であるが、われわれにとり宝の山がまだまだ手つかずであちこちに残されてゐることは、どうやら事実らしいのである。が、それにしても、見出しもなく秩序もなしに乱雑に束ねられたこれらの堆積が自分の目の前に投げ出されたとき、われわれ異郷の学徒、まして馳け出しの身に、いつたい下すべき如何かる手だてがあるとでもいふのだらうか。選りわけ、判読し、事実関係を洗ひ、確証した事実を歴史的に位置づけて、史料を全体の中に組み入れ分類してゆく……労多きこれらの作業が、局部的に案内知つた者の狭い範囲に限つての仕事といふならともかく、大局的には、該博なその道の大家達にも、決して坦々たる道ではなかつたといふことは、これまで夥しい史料集 colecciones de fuentes の刊行にもかかはらず、なほかつ史料の探訪が完全を保し難いといふ目下の事実、またあの整然たる《Monumenta Germaniae Historica》の統一性に遂に比肩しうる企てがいまだにこの国では陽の目を見てゐないといふ遺憾な事実が、これをゆくりなくも証明してゐる。といふよりも、裏をかへせば、それはまた、この老大国の想像を絶する歴史の豊かさ、従つて他国の尺度では測りえぬ啞然とするばかりの史料の厖大といふことを、逆に証明してみせてゐるのだとも言ひ得る。そこで、かうした歴史のマンモスと取り組み、史料の大波に立ちむかつて来たこの国のアカデミズムの既往の成果、その営々たる努力の跡を一先づふり返つておくことも必ずしも無益ではなからうと信ずるのである。

十八世紀は啓蒙の世紀、啓蒙の世紀はまた afrancesamiento と erudición の時代である。[7] この時代に図書館の開設をみ、古文書の整理、文書館（アルチーボス）の整備が行なはれたとしても、不思議ではないであらう。[8] 一七一二年には、フェリーペ五世の命によりマドリーに Biblioteca Nacional が誕生してゐる。時に凡そ八〇〇〇巻の典籍をもとにして、当代の erudito なる Juan Ferreras の指

導の下に発足したものであつたが、現在蔵するところは百万冊以上、スペインで最も代表的なものであることは言ふまでもない。一七三八年以来は同じく首都に Real Academia de la Historia が軌道に乗ることとなつた。最初は私的な文人の寄合（テルトゥリア）だつたものが、Academia Universal から更に Academia de la Historia となり Real Biblioteca での会合が重なるうち、遂に王立(Real)なる名を冠するにいたつたのである。《Diccionario histórico-crítico universal y de España》を手始めに幾多の所産がこのあと踵を接するわけだけれど、レオン街の Biblioteca de la Real Academia de la Historia が manuscritos 資料に関しては、エル・エスコリアル僧院のそれ Biblioteca del monasterio de El Escorial と並んで、今日最も重要とされてゐることは、他の何ものにもまさるその所産とすべきであらう。文書館に目を転ずるなら、この時代の大きな事件の一つは、やはりセビーリャにおける[9] Archivo de Indias の創設を措いてはない。周知のやうに Archivo General del Reino として古来最も由緒ふかいとされて来たのは、カスティーリャの旧都バリャドリーを南東に去ること凡そ一〇キロ、宏壮なるシマンカス Simancas 城をそのまま転用したそれであるが、[10]その後加へられた新大陸関係の諸記録を一七七八年にいたりカルロス三世の命でここからセビーリャの Casa Lonja に移管して出来たのがつまり前記アルチーボの創設だつたのである。文字通り中南米史の宝庫であつて、[11]今日見学者の群のたえないのはともかく、壮観を通りこしてむしろ殺風景な見はるかす八万余点の documentos の片隅で、タイプを前にした司書達が manuscritos を忽ち活字にして行くのを目撃するのは、一種の感激であつた。フェリーペ五世の命でバルセローナに Archivo de Corona de Aragón が設けられたのも十八世紀のことである。蓋し地方(regionales)アルチーボとしては最大のものであるが、このほかにも civiles, militares, eclesiásticos..... とそれぞれ個別の分野での文書館が幾多開放せられたのも、やはり十八世紀だつたことは、記憶しておいてもよいであらう。なほ前記 Real Academia de la Historia であるが、このアカデミアの手でその後一八六六年にいたり組織せられた Archivo Histórico Nacional（在マドリー、現在セルラーノ街）は、編集されたものを別としても個々の documentos は二〇万点、九世紀から現代に及ぶその史料が、研究者の至便に供されてゐることも一言しておかう。[12]

ところで次の問題は、言ふまでもなく、かうした諸史料の刊行である。その活動の中心が、右の Real Academia de la Historia や、既に論及した Centro de Estudios Históricos であつたことは、事の性質上当然であるが、今世紀に入り「学術振興会」

《Junta para Ampliación de Estudios》の創設（一九〇七年）による文化事業の活潑化をさることながら、内戦を克服した後は、一九三九年来、「最高（または高等）学術会議」《Consejo Superior de Investigaciones Ciéntificas》＝C. S. I. C. が発足して、以後このC. S. I. C. にほぼ事業がうけつがれてゐるわけである。いまその主な成果だけでも左に列記することとしやう。

P. Enrique Flórez, España Sagrada. Teatro geográfico-histórico de la Iglesia de España (52 vols.), Madrid, 1747–1918〔フロレスの仕事は第29巻までで、あとはレアル・アカデミア・デ・イストリアの手になる。〕; Jaime Villanueva, Viaje literario a las iglesias de España, 22 vols., Madrid 1803–1852; L. de Zaragoza y R. de Huesca, Teatro histórico de las iglesias de Aragón, 9 vols. 1ª. ed., Pamplona 1780, 2ª. ed., Zaragoza 1807; Colección de las crónicas y memorias de los Reyes de Castilla, por Eugenio de Llaguno y Amirola y otros, 7 vols., Madrid 1779, 1787; Colección de documentos inéditos para la Historia de España, por Martin Fernández de Navarrete y otros, 112 vols., Madrid 1842–1895; 続篇として Nueva Colección de documentos inéditos para la Historia de España y de sus Indias, 6 vols., Madrid 1892–1926; M. Fernández de Navarrete, Colección de los viajes y descubrimientos que hicieron por mar los españoles desde fines del siglo XV, 5 vols., Madrid 1825–1837; Colección de documentos inéditos relativos al descubrimiento, conquista y colonización de las posesiones españolas en América y Oceanía, por J. F. Pacheco y otros, 42 vols., Madrid 1864–1884; その第二輯として Colección de documentos inéditos relativos al descubrimiento, conquista y colonización de las antiguas posesiones de Ultramar, 18 vols., Madrid 1885; Colección de cédulas, cartas patentes, provisiones, reales órdenes y documentos concernientes a las Provincias Vascongadas,..... en el Real Archivo de Simancas, por Tomás González, 6 vols., Madrid 1829–1833; Colección de documentos inéditos del Archivo general de la Corona de Aragón, 41 vols., Barcelona 1847–1910; Memorial Histórico Español. Colección de documentos, opúsculos y antigüedades que publica la Real Academia de la Historia, 49 vols., 1851–1948.〔一九一五年に中絶したが一九四七年より再び続行〕; Colección de fueros municipales y cartas pueblas de los Reinos de Castilla, León, Corona de Aragón y Navarra, por Tomás Muñoz y Romero, tomo I, Madrid 1847.〔続刊なし〕;

Actas de las Cortes de Castilla, por la Real Academia de la Historia, 41 vols., Madrid 1862-1918; Cortes de los antiguos Reinos de León y Castilla, por la Real Academia de la Historia, 7 vols., Madrid 1861-1903; Cortes de los Reinos de Aragón y de Valencia y Principado de Cataluña, por la Real Academla de la Historia, 25 vols., Madrid 1896-1919; Los Códigos españoles concordados y anotados, 12 vols., Madrid 1847-1851, 2ª. ed. 1872-1873; Códigos antiguos de España. Colección completa de todos los Códigos de España desde el Fuero Juzgo a la Novísima Recopilación, 2 vols., Madrid 1885. Collectio maxima conciliorum omnium Hispaniae et Novi Orbis, 6 vols., Roma 1753-1755; Colección de Cánones de la Iglesia de España, 6 vols., Madrid 1859-1862; Fuentes para la Historia de Castilla, por los padres benedictinos de Silos, 3 vols., Burgos 1906-1910; Colección de documentos para la Historia de Aragón, por E. Ibarra y otros, 12 vols., Zaragoza 1904-1921; Textos latinos de la Edad Media española, por el Centro de Estudios Históricos, 4 vols., Madrid 1918-1924; Colección de documentos inéditos para la Historia de Ibero-América, por Rafael Altamira. 14 vols., Madrid 1925-1932; Fontes Hispaniae Antiquae, por A. Schulten, P. Bosch Gimpera y L. Pericot, Barcelona 1922-1947; Archivo Histórico Español. Colección de documentos inéditos para la Historia de España y de sus Indias, por la Academia de Estudios Histórico-Sociales de Valladolid, 5 vols., Valladolid 1928-1932; Colección de Crónicas españolas, por Juan de Mata Carriazo, 9 vols, Madrid 1940-1946; 進行中の Colección de diarios y relaciones para la Historia de los viajes y descubrimientos, por C. S. I. C., 5 vols., Madrid 1943 y ss.; Documentos inéditos para la Historia de España, por duque de Alba y otros señores, 13 vols., Madrid 1936-1957; Archivo Documental Español, por la Real Academia de la Historia, 22 vols., Madrid 1950-1966. そのほか《Biblioteca de Autores Españoles》――普ト Ribadeneyra のコンクヽキンとして知られてゐたのが、長い絶版の後、戦後再刊されて既に二百冊をこえるあの「作家全集」であるが――つゞ凡そ三十冊は、たとへば《Historiadores de sucesos particulares》, 《Historiadores primitivos de Indias》, 《Crónica de los Reyes de Castilla》などのごとく、或る意味での史料集としても是が非にも挙ゲても武器ではある。この点、従つて、メネンデス・ピラー

ヨの監修になる《Nueva Biblioteca de Autores españoles》, Madrid 1905-1917 も、同じく注目を要することは申すに及ばず、たとへばその第五巻が、前述の R. Menéndez Pidal, 《Primera Crónica general》 Madrid 1906 だと言へば、凡そこの全集の占める重さもわからうといふものである。《Biblioteca de Autores cristianos》, Madrid 1965- が、これも幾多の重要な典籍を含むことは、贅言を要しまい。なほアラビア学関係で二、三つけ加へるとするならば、十九世紀のアラビストとしては第一人者の Francisco Codera による Biblioteca arábico-hispana, 10 vols., Madrid 1882-1890 と、Colección de obras arábigas de Historia y Geografía, por la Real Academia de la Historia, vol. I. 1867; vol. II. 1926〔二冊が刊行されたのみ〕があゐ。最後に蛇足であるが、[15] 学生向きとして Fernando Díaz-Plaja, 《La Historia de España en sus documentos》も紹介しておかう。これは謂はば「史料スペイン史」とでもいつたもの、さはりとなる史料の原文だけを綴り合はせてのスペイン通史で、十六世紀、十七世紀、十八世紀、十九世紀、二十世紀、一九二三年——三六年、一九三六年——三九年がそれぞれ一冊をなし、目次や参考文献を見渡すだけでも、この著者なりの史料配置、その取捨と選択の或る基準が窺ひ知られて、少なくとも筆者には甚だ裨益してくれるところ多い手軽で便利な叢書だつたと告白しておく。なほ本叢書は、ほかにもいろいろ重要な刊行物のある Instituto de Estudios Políticos (Madrid) 刊。

右と関連して史料の目録（カタログ）といふものにも、一面、触れないではすまされまい。ただし容易に推察のつくごとく、この種のものは、てんでに、またむやみと多くて、殊更単純化した紹介が、却て中途半端に失する結果を招来しはせぬかを筆者は惧れる。ならばいつそのこと比較的まんべんなく、しかも手頃、且つ入手し易いその一覧表をありのままに持ち出して、読者の参照に委ねた方が、まだしも親切といふものである。その点、幸ひにしてわれわれは、たとへば極く最近待望の復刊成つた Germán Bleiberg, 《Diccionario de Historia de España》, 3 vols., 2ª. ed., Madrid, Revista de Occidente, 1969 の第三巻、《Apéndice bibliográfico》に頗る要領よく、また行き届いた《catálogos y repertorios de fuentes》なる一章を繙きうるやうになつた。因みに本辞典はスペイン史事典としては、項目も一応揃ひ、叙述もかなり詳しく且つまとまつて内容がたかく、——慾を云へばきりがないが——先づはスペイン史学徒たる者の真先に座右に備ふべき好伴侶と称しうる。その《Apéndice bibliográfico》にしても、土台としたのは標準的なスペイン史概説、Luis G. Valdeavellano, 《Historia de España》,

Madrid, 1ª. ed. 1955; 4ª. ed. 1968 のビブリオグラフィアであつて、さきに参考に供した《fuentes》はもとより、それぞれの専門的な《monografías》に関しても、一応の展望はここにうることが出来るであらう。

序手ながら、かかる《monografías》その他に関して云へば、ほかに学生用の A. Ubieto, Juan Reglá, José María Jover, Carlos Seco Serrano 共著《Introducción a la Historia de España》, Barcelona 1967 に甚だ要を得た主な文献の一覧があつて利便、且つわかりやすい。またメネンデス・ピダールの協力者として例の《Historia de España》叢書の実現にも尽瘁した Pedro Aguado Bleye (1884–1953)は、その執念のライフワーク《Manual de Historia de España》, 3 vols., Madrid 1947–1956 (但し未完の第三巻は Cavetano Alcázar Molina が手を加へ、完成させた)により斯界に不滅の足跡をのこしてゐるが、現に学徒を裨益してやまぬこの労作は、それなりに精選されたビブリオグラフィアのほかに、その文化史の叙述を縫つて見えがくれする学問史・史学史への論及により、サンチェス・アロンソのあの尻切れ蜻蛉の「史学史」を或る意味で補つてくれさへする。これまたスペイン史を志す者の必携の書とすべきであらう。学生用としてはもう一冊、C. Pérez-Bustamante, Compendio de Historia de España, 12ª. ed., Madrid 1969 も簡潔で頗る普及してゐるが、その Bibliografía も簡便の見地からは推奨しうる。(極く最近出た Vicente Silio, Nuevo Manual de la Historia de España, Madrid 1969 は「便覧」としての構想には新機軸があり、或るセンスがあって好著であるが、残念なことに研究書誌がない。) いづれにせよ、詳しくは、同じくサンチェス・アロンソのあの多岐亡羊の書《Fuentes de la Historia española e hispanoamericana》などに拠るほかないことは前述した通りであるが、[16] 最後に、五〇年代以降の、われわれには最も身近なこの国史学界の動向につき、まことに時宜をえた情報源がバルセローナ学派の努力でひらかれてゐることをお知らせしておかう。《Indice Histórico Español》がすなはちそれ。一九五三年の発刊で、季刊書評誌に近いかたちをとるが、無論逐次的定期的《Bibliografía》が主体であつて、スペイン史、並びに関連諸分野に関する内外諸書を殆んど漏れなく挙げるばかりか、その重要度、性格別に従つて様々のマークをつけたり、大作、問題作などには短いながらもかなり突つ込んだコメントをつけてゐる。学界の近況・現況を知るう上では、正に願つてもない福音なのである。因みに企劃の総元締は前述のビセンス・ビーベス Jaime Vicens Vives, 1910–1960、既に《Historia social y económica de España y América》, Barcelona 1957–59 や《Manual de Historia

económica de España, Barcelona 1958 などでも知られた経済史畑の第一人者であるが、[17] その監修になる《Historia de España y América》5 vols., Barcelona 1961 の功績とともに、このIndice も特筆すべきその業績としなくてはならぬであろう。なほ、その各号に亙ってではないが、折にふれ、範囲を限って研究状況の展望などが行なはれてゐるのは、甚だ有益である。刊行がおくれがちで、また未整理な点もあるので、最近数年については割愛せざるをえないが、それまでのところを所収巻別に御参考までに掲げておく。

Ⅰ巻（一九五三―一九五四年）、V. Vives, Los estudios históricos españoles en 1952-54

Ⅱ巻（一九五五―一九五六年）、J. Mª. Lacarra, Los estudios de Edad Media española de 1952 a 1955 ; V. Vives, Desarrollo de《Indice Histórico Español》en el bienio 1955-56

Ⅳ巻（一九五八年）、Guillermo Céspedes (Sevilla), Estudios sobre Hispanoamérica en Europa y en Estados Unidos.

Ⅴ巻（一九五九年）、E. Giralt y Raventós (Barcelona), Los estudios de historia agraria en España 1940-61

Ⅷ巻（一九六二年）、Carlos Seco Serrano (Barcelona), La bibliografía reciente sobre la Segunda República española (1931-36)

Ⅸ巻（一九六三年）、Juan Mercader Riba (Madrid), La historiografía de la guerra de la indipendencia y su época desde 1952 a 1964.

Ⅹ巻（一九六四年）、Luis Pericot, La investigación del Paleolítico superior en España

三　雑　誌

地方色の豊かさ――それはヨーロッパのいづこを問はぬ目を瞠らせる事実だけれども、その多彩と絢爛においてイベリアを凌ぐところが他にあるだらうか。観光めあてのあれこれは論外としよう。だが、それさへもこの国の場合には、究めるなら、地方民俗、また地方史の奥深い問題に直ちにかかはつて来る。民俗学、或ひは地方史研究の盛況が、他国とは比較にならぬ意味合ひにおいて、如何にもと頷かれるわけである。が、今の場合、さうした面での研究そのものの内容につき立ち入らうとする考へはない。それにはまた別の機会に稿を改めて取り組むしかない。[18] ただ願はくは、ここで論じ残すところが如何に大きく且つコンパクトなる内容を含むかといふことを御洞察いただいた上で、僅かに直接間接関連

する諸般の雑誌を掲げ、同学の御参考に供したいといふまでである。尤もそれさへも網羅的にといふことは到底不可能である。たとへば、最高学術会議（C.S.I.C.）別館歴史学研究所（Instituto Jerónimo Zurita）の図書室に蔵するところは、大凡二五〇種、同じく民俗学の図書室にはかれこれ三五〇種、勿論中南米各地のそれをはじめ外国誌や関連諸分野のそれを含めてではあるが、この一事を以てしても思ひ半ばに過ぎるといふものであらう。従つてここでは極く常識的に基本的なものを挙げるにとどめ、より詳しくは、個々のモノグラフィアとともに、必要の範囲内で関説されるであらう近藤氏の以下続稿に譲りたいと思ふ。

ところで、基本的なさうした諸雑誌を取り上げようとするに当つて、その前にどうしても一言なからざるをえないのが、既に折々触れられた最高学術会議（C.S.I.C.）のことである。前述のやうに創設は内戦直後、十九世紀以来学界組織化の模索と宿望を漸く全国的規模において一応実現の軌道に乗せたものと言へるが、これをしも独裁政権の治績の一つ、しかもその最たるものと言へば、抵抗を感じられる向きも多いであらうか。が少なくとも、かうした事業への政府の腰の入れ方、取り組み方には、どこやらの経済大国とは比較にならぬものがあるのであつて、その予算措置の内訳はともかく、一般、並びに各専門別図書館としての内容の充実、研究・出版活動の円滑な進行は、数字がこれを明らかにしてゐる。組織は大きく分けて División de Humanidades と División de Ciencias（理科系）、それぞれ《Patronato》から各《Instituto》に分たれたその組織の網を、うち前者に限つて別表に御覧いただきたいが、中でも重要なのは、その各々の《Instituto》が発表してゆく一連の定期刊行物による研究の成果であつて、事実、以下列記する史学関係の主要なる諸雑誌が大半はかくて C.S.I.C. より刊行のそれであるのも異とするには当らぬであらう。

先づ或る程度綜合的な史学雑誌として真先に指を屈しなくてはならないのは、C.S.I.C. は Instituto "Jerónimo Zurita" の手に成る《Hispania, Revista Española de Historia》(1941-) である。主としてスペイン史上の諸問題に関しての研究は言ふまでもないとして、方法論や史料・文献紹介まで幅ひろいが、本誌二十五周年を期してはじまつた《Cuadernos de Historia, Anexos de Hispania》も見落すことができぬであらう。因みにその第一巻（一九六七年刊）は《El tránsito de la Edad Media al Renacimiento》、第二巻（一九六八年刊）は《Relaciones Hispano-francesas a través del tiempo》、第三巻（一九六九年刊）は《La sociedad castellana en la baja Edad Media》をそれぞれテーマとして、いづれも好個の論文集である。古典古代に関しては、前代におけ

る古典言語学の立ちおくれが尾をひいてゐて、C. S. I. C. の Instituto《Antonio de Nebrija》の図書を縦覧しても、どうやらこの世界における先進諸国への追随に主眼があるやうにもみうけられるが、[19] それでも Antonio Tovar（サラマンカ大学前総長、戦後米国に移住、目下滞独中）をはじめ、ましてやイベリア古代史に関してはそれなりに出色の研究者に事欠かないのであつて、《Emérita, Revista de Lingüística y Filología Clásica》にみる歴史寄りの諸論攷などがその一応の指標となる。なほ序手ながら、サラマンカ大学の古典言語学研究室 Seminario de Filología Clásica を拠点とする《Minos, Revista de Filología Clásica》が、右のトバール氏をはじめ Emilio Peruzzi や Martín S. Ruspérez を先導として、戦後斯学の新局面たるミケーネ文字の解読にたえず一翼を担つて来たのは、括目するに足る事実であつて、この国にすすんだ一面もあるその証明としてここに特筆しておく。古典言語学とは逆に一つの学史的伝統が過去からの連続を保つてゐて立ちおくれを知らなかつたのがアラビア学である。ド・サスィの弟子 Pascual de Gayangos, 1809–1897 やドージ R. P. A. Dozy の協力者 Francisco Javier Simonet, 1829–1897 に遡るまでもない。ガヤンゴスの門に出たコデーラ Francisco Codera y Zaidín, 1836–1917 こそは、あの十巻に及ぶ《Biblioteca arábico-hispana》1882–95 の刊行者、スペイン東洋学派の真の建設者であつて、その学統を継ぐリベーラ Julián Ribera y Tarago, 1858–1934、また神学乃至は思想史的研究で一新紀元を劃したアシン Miguel Asín Palacios, 1871–1944 を経て、その弟子ガルシア・ゴメス Emilio García Gómez, 1905–にいたるや、かれらを中心に《Al-Andalus, Revista de Estudios Arabes》(Madrid-Granada 1932–) の編輯が発足し、C. S. I. C., Instituto de Estudios Arabes《Miguel Asín》の事業として今なほこの国アラビア学の最高の水準を誇つてゐるわけである。並んで好一対をなすものにユダヤ研究がある。イベリアは言ふまでもなくセファルディームの故地、スペイン人の黄金の世紀は同時にまたかれらの黄金時代とあつて、それなりの文化的連続は疑ふべくもないのであるが、それがいはゆる歴史学的な研究の対象として取り上げられるやうになつたのは、José Amador de los Ríos, Estudios históricos, políticos y literarios sobre los judíos en España, Madrid 1848. あたりからとすべきであらう。[20] 今世紀に入つては更に Ignacio Bauer, Manuel L. Ortega などの逸材を得ていよいよその基盤はひろがるが、一九四一年 C. S. I. C., Instituto《Arias Montano》による《Sefarad, Revista de Estudio Hebraicos y Oriente Próximo》の発刊は、いはば初めて統一的なアカデミズムの態勢が

とのつたことを意味するもので、その主導者たるJ. M. Millás Vallicrosa, Francisco Cantera 等を筆頭に、また民俗学の泰斗 Julio Caro Baroja——《Los judíos en la España moderna y contemporánea》, 3 vols., Madrid 1961 の著者——などがこの方面での最右翼だといふことは申し上げておいてもよいであらう。なほカロ・バローハ氏の名が出た序手に民俗学雑誌を一つ挙げておく。即ち《Revista de Dialectología y Tradiciones Populares》, 1944- これは殆んど同氏の主宰と言つてよい。また先史学や考古学にも跨がるものとしては《Ampurias, Revista de Argueología》, Barcelona 1939-。この分野ではそのほか《Archivo Español de Arqueología》, 1925- がある。考古学の先達としては Gómez Moreno とカタルーニャの P. Bosch i Gimpera 並びに Luis Pericot García の名を挙げておかう。ここで歴史プロパーに話を戻すと中世史には特にすぐれた雑誌があるやうである。前述のサンチェス・アルボルノスの主宰する《Cuadernos de Historia de España》, Buenos Aires 1945- ——尤も中世史にのみ限られたものではないが——をはじめとして、《Estudios de Edad Media de la Corona de Aragón》, Zaragoza 1945-、《Anuario de Estudios Medievales》, Barcelona 1964- がそれ。近代史に関しては《Estudios de Historia Moderna》, Barcelona, 1950- がよい。無論、新大陸関係には事欠かないが、代表的なのは[21]、《Revista de Indias. Estudios hispanoamericanos》, 1940- や《Cuadernos Hispanoamericanos》, 1948-。南米各国刊行のそれは省略する。ただ如何にも残念なのは、現代史を専らとする雑誌がないこと。しかし昨年十月十日マドリー大学開講々演で Vicente Palacio Atard 教授が報告したごとく(《Consideraciones sobre la Investigación actual de nuestra historia contemporánea》)若い世代の関心が多く現代史にむかひ、また内戦史の研究もそろそろ解禁となつて、続々史料や研究成果もあらはれはじめてゐる折だけに、あながち見込がなくもないであらう。(cf.: R. de la Cierva, Bibliografía sobre la Guerra de España(1936-39)y sus antecedentes, Madrid-Barcelona, 1968) 少し角度を変へて、部門別に拾つてみると、先づ法制史では既に述べた《Anuario de Historia del Derecho Español》, 1924- がある。もともと法学は、さきのアラビア学などとともに、この国で或る独自なる伝統を担ひつづけて来た分野であつて、イノホーサに連なるスペイン法史学派の起点をなしたその雑誌にしても、古代・中世などに関する極めて豊富な内容を含んで、むしろ歴史家にとり依然汲めどもつきぬ泉と言ふことが出来るのである[22]。なほ J. Antonio Maravall や Luis Díez del Corral らが健筆を揮つてゐる《Revista de Estudios Políticos》,

1941- も存外興味ふかい歴史論文を載せてゐることがあるのは、記憶しておいてよいことである。転じて教会史・宗教学の領域に移ると、ここでも或る意味で erudición の連続が認められなければならないことは想像に難くないが、雑誌としては先づ《Historia Sacra》1948-, 類似の立場に立つが、もつと進歩的な一面も併せた《Anthologica Annua》1952-, ややかたよるが《Analecta Sacra Tarraco. nensia de Ciencias históricoeclesiásticas》, Barcelona 1925- がある。美術史では《Archivo Español de Arte》や《Arte Español. Revista de la Sociedad Española de Amigos del Arte》を挙げておけばよいであらう。[23] 最後にいはゆる補助学に関して言へば、碑文学の《Hispania Antiqua Epigraphica》, 系譜学・紋章学の《Hidalguía》などを、ともかくもつけ加へたく、[24] 総じてかうした特殊の分野を対象とする刊行物は、片々たるものまでを含めれば、存外何かと多いことを附言しておかう。

以上、ひろい意味でのスペイン史に照準を合せはつつ、主たる諸雑誌を部門別に瞥見したわけでるが、をはりに、更にもつと広い意味での綜合的な学術雑誌につき、贅言を加へることとしたい。先づ《Arbor》. これは右の諸雑誌が多くは C. S. I. C. の刊行物であるのに対し、これらを綜合する立場において同じく C. S. I. C. の手で出されてゐる一般誌である。無論歴史論文も珍らしくはなく、それらを集めて、《Estudios sobre Historia de España》, 1965 が公けにされてゐるほどである。またオルテガの名とはきつてもきれぬ関係にあるあの《Revista de Occidente》, primera época 1923-1936; segunda época 1963- も、われわれとしては逸することが出来ぬものであらう。ほかに《Boletín de la Real Academia de Buenas Letras de Barcelona》, Barcelona 1901-; 《Boletín de la Real Academia de la Historia》, Madrid 1877-; 《Boletín de la Real Academia Española》, Madrid, 1914-, 更には《Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos》なども不可欠であることは言ふまでもない。[25]

スペイン国内に関するところはこの辺にし、あと簡単に外国における主要なスペイン研究の諸雑誌を左に列記して稿を了らう。すなはち《Revue Hispanique》81 vols. & Gen. Index 1-50, Paris-New York 1894-1933; 《Bulletin Hispanique》, Bordeaux; 《Bulletin of Hispanic Studies》, Liverpool 1923-; 《The Hispanic American Historical Review》, Baltimore-Toronto 1918-; 《Hispanic Review》, Pensilvania; 《Hispanic American Reports》, Stanford Univ. 1948-. またこれらと密接に関連して《Revista

Portuguesa de História》, Coimbra 1941–. なほ厳密な意味での雑誌ではないが《Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens-Spanische Forschungen der Görres-Gesellschaft》, 1962 のやうなものも、やはり度外視するわけにはいかない。

*　　*　　*

これを以て雑雑なる紹介㊀の筆を擱くことにする。繁簡よろしきを得ず、前後相錯綜して、頗る首尾一貫を欠くものとなつてしまつたが、力不足では致し方もない。せめてもイントロダクションの域を踏えぬやう留意したつもりではあるが、留意が却てイントロダクションそのものとしても不徹底な結果を招いてしまつたやうである。が、ともかくも不徹底ながら土俵の周囲は辛うじて一周することが出来たらしい。次号より始まる近藤氏の本番に読者とともに大いに期待したいものである。

① cf. Rafael Calvo Serer, Teoría de la Restauración, Madrid 1925

② 島字 Manuel も Historia de América prehispánica の権威で現在マドリー大学教授。学者一家である。

③ 御参考までに既刊分を示すと、各時代別に目下の代表的専門学者の顔ぶれが一目瞭然である。(*にはスペンテス・ピダールの序文あり) Tomo I. vol. I. *España prehistórica. por Eduardo y Francisco Hernández Pacheco, Luis de Hoyos Sáinz, Martín Almagro, Alberto del Castillo, Juan Maluquer y Juan de Mata Carriazo; vol. II. Esp. prehist. La España de las invasiones célticas y el mundo de las colonizaciones. por Martín Almagro y A. García y Bellido,; vol. III. España prerromana, por A. García y Bellido, Blas Taracena, Juan Maluquer y Julio Caro Baroja. Tomo II. *España romana, por Pedro Bosch Gimpera, Pedro Aguado Bleye, Manuel Torres, José M. Pabón, Pascual Galindo, José R. Mélida, Pedro M. de Artiñano, José Ferrandis y A. García y Bellido. Tomo III. *España visigoda, por Manuel Torres López, Octavio Gil Farrés, Ramón Prieto Bances, Rafael Gibert y Sánchez de la Vega, Matilde López Serrano, Fray Justo Pérez de Urbel, Emilio Camps Cazorla y J. Ferrandis Torres. Tomo IV. España musnlmana. Hasta la caída del califato de Córdoba (711–1031). por E Lévi Provençal. Traducción e introducción por Emilio García Gómez. Tomo V. Esp. musulm. Hasta la caída del califato de Córdoba. (711–1031). Instituciones y vida social e intelectual, Arte califal, por E. Lévi Provençal y Leopoldo Torres Balbás. Traducción y advertencia preliminar por E. García Gómez. Tomo VI. *España cristiana. Comienzo de la Reconquista (711–1038), por Fray Justo Pérez de Urbel y Ricardo del Arco y Garay. Tomo XIV. España cristiana, Crisis de la Reconquista. Luchas civiles. por Ramón D'Abadal de Vinyals, Luis Suárez Fernández y Juna Reglá Campistol. Tomo XV.* Los Trastámaras de Castilla y Aragón en el siglo XV. por L. Suárez Fernández, Angel Canellas López y Jaime Vicens Vives. Tomo XVII, vol. I. *La España de los Reyes Católicos (1474–1516). por L. Suárez Fernández y Juan de Mata Carriazo.

⑩ 61. 505 legajos, 5. 196 volúmenes de documentos あり。

⑪ cf. José Tudela de la Orden, Los manuscritos de América en las bibliotecas de España, 1954

⑫ Archivo Histórico Nacional にはその後特にアメリカ関係の史料が多く加くられてゐる。図書館としては、なお十九世紀につくられた Alcalá de Henares におけるそれを逸しえない。またスペイン史の重要史料は外国にも夥しく流れ入るが、パリの Bibliothèque Nationale、ローマの Biblioteca Vaticana、ワシントンの Library of Congress が殊に重要。諸国のスペイン史研究機関もそれぞれの持味があって、いづれ機会をあらためて紹介しなければならないが、今は最もすぐれた一例として西ベルリーンの Ibero-amerikanisches Institut (preußischer Kulturbesitz になってゐるが、スペイン語圏諸国民の寄与によってつくられたもの) だけを挙げておく。

⑬ スペインの歴史学会にあたるものは Asociación Española de Ciencias Históricas であるが、C. S. I. C.の名 Instituto が、それぞれ Asociación を構成する entidades と考へられ、二名づつ delegados を出すことになってゐる。

⑭ 主として Germán Bleiberg, Diccionario de Historia de España, 2.ª ed. Madrid 1969, Tomo. III. pp. 1083 y sigs. 《Apéndice bibliográfico》による。しかも一般的なもののみで、各時代、各部門の特殊なもの、fuentes narrativas, biografías, autobiografías 等々は悉く省かざるをえなかった。但し一定の枠内では、近藤氏が紹介されるであらう。

⑮ 矢島文夫、「スペインのアラビア学者たち」(『スペイン図書』No. 8. 一九六三年) 参照。因みにわが国におけるスペイン書専門書店として最も代表的なのは、東京神田のイタリア書房であるが、「スペイン図書」は同社の発行。

vol. II. La Esp. de los RR. CC. (1474–1516). por L. Suárez Fernández y Manuel Fernández Alvarez. Tomo XVIII. *La España del emperador Carlos V. (1500–1558; 1517–1556). por Manuel Fernández Alvarez. Tomo XIX. vol. I. España en tiempo de Felipe II. (1556–1598). por Cayetano Alcázar Molina y el P. Luis Fernández y Fernádez de Retana. vol. II. Esp. en tiempo de Felipe II (1556–1598). por el P. Luis Fernández y Fernández de Retana, Tomo XXVI. La España de Fernando VII. por Carlos Seco Serrano y Miguel Artola Gallego.

④ 諸々の academias が十八世紀の学術を代表するとするなら、《Ateneo》は十九世紀のそれを代表する。九八年の世代にまつはる学者・文人をはじめとする肖像画がとこうゆしと壁面を埋めてゐる。

⑤ かれの出世作は《El pensamiento de Cervantes》(Madrid 1925) ほかにローペ・デ・ベーガの研究や、言語学関係の労作で名高いが、《Origen, ser y existir de los españoles》,《Hacia Cervantes》,《De la edad conflictiva》,《Santiago de España》などの力作がある。

⑥ cf. Jaime Vicens Vives, Aproximación a la Historia de España, Barcelona 1952, p. 172. 本書はスペイン史の入門書として、大冊ではないが、極めて程度がたかい。

⑦ スペインの啓蒙時代は特にオビエドの学匠 P. Benito J. Feijóo Montenegro 師 (1676〜1764) に象徴される。

⑧ 松田毅一「在南欧日本関係文書探訪記」(潮文社) は日本関係が主であるが、アルチーボや図書館の一般的な状況についても参考になる。なほもっと以前の状態については、「キリシタン研究」誌上に村上直次郎博士の連載報告があった由。

⑨ ここにはまた Biblioteca Colombina がある。Cristóbal の息子 Fernán Colón の寄贈したもので、manuscritos 五〇〇点を含む。

⑯ そのほか R. Ballesteros, Las fuentes narrativas de la Historia de España durante la Edad Media 1417–1474, Palma de Mallorca 1908;——, Las fuentes narrativas de la Historia de España durante la Edad Moderna, vol. I. Los Reyes Católicos, Carlos I., Felipe II., Valladolid 1927; G. Cirot, Études sur l'historiographie espagnole. Les Histoire générale d'Espagne entre Alphonse X. et Philippe II. (1285–1556), Bordeaux 1904. なども参照。

⑰ スペインの経済学は José Canga Argüelles から更にペルセローナの A. Flores de Lemus を経て、特に経済史では、その弟子 Ramón Carande などにより、殆んど一つの業地が拓かれることになった。J. Vicens Vives はじめ Jorge Nadal Oller などペルセローナで経済史が盛んなのも偶然ではない。

⑱ しかしたとへば少なくとも次のようなものくらいは記憶にとどめておいてもよいであらう。《Anuari del Institut d'estudis Catalans》(Barcelona 1907–1931); 《Caesaraugusta》 (Zaragoza 1955–); 《Cuadernos de Estudios Gallegos》 (Santiago de Compostela 1944–); 《Principe de Viana》 (Pamplona 1940–)

⑲ 店頭には、たとへば Wilcken, Rostovzeff などの翻訳が並んでゐる。

⑳ かれにはまた《Historia social, política y religiosa de los judíos en España y Portugal》, 3 vols., Madrid 1875–1876 の著がある。

㉑ ほかに《Archivo Iberoamericano》(Madrid 1941–)

㉒ 《Revista de Derecho Canónico》(1940–); 《Revista de Derecho Internacional》 (1948–); 《Anuario de Historia económica y social》 (por Seminario de Historia económica y social, Madrid 1968–) も参照。

㉓ 更に《Boletín de la Sociedad Española de Excursiones》.

㉔ これはゆる補助学の雑誌ではないが、スペイン史を学ぶための補助的な手段をいくつか挙げよう。先づ歴史地図は初歩者向きだが、J. Vicens Vives, 《Atlas de Historia de España》, Barcelona 1955 がよい。詳しくはないが、簡潔明瞭である。クロノロジーは Jesús P. Martínez, 《Historia de España en Cuadros esquemáticos》, vol. I. Edades antigua y media; vol. II. Edades moderna y contemporánea, Madrid 1963. が、稍々見にくいながら、よい。J. Agustí y Casanovas, P. Voltes Bou, José Vives 共著《Manual de Cronología Española y Universal》, Madrid 1952 (C. S. I. C. 刊) は、使用しにくいが網羅的である。なほ系譜学では《Diccionario de Historia de España》第三巻末尾に、イベリアの諸王家の完全なる genealogía が、オランダの歴史家 W. G. A. Apon 氏の手で完成したが、同辞典発刊直前の同氏急死により採録しえなかったと記してある。Alberto y Arturo García Garrafa, 《Enciclopedia Heráldica y Genealógica Hispanoamericana》, 59 vols., Madrid 1919–1936 も参照。paleografía には Agustín Millares Carlo, 《Tratado de Paleografía española》, Madrid 1932; Antonio C. Floriano Cumbreño, 《Curso General de Paleografía y Paleografía y Diplomática españolas》, Oviedo 1946 などがある。特に制度史上の術語概念については、Luis G. de Valdeavellano, 《Curso de Historia de las Instituciones Españolas de los orígenes al final de la Edad Media》, Madrid 1968 の《Indice de materias》が中々に便利。

㉕ そのほか Real Academia de la Historia などにおける《Discursos》や C. S. I. C. の Instituto Balmes から出してゐる《Monografías Histórico-Sociales》の数々も忘れるべきではない。

別表（*は同じくスペイン語で C. S. I. C. 関係官庁、*を付さないものはスペイン語で C. S. I. C. 関係官庁）

C. S. I. C. *División de Humanidades.*

Patronato "Raimundo Lulio"

*Instituto de Teología "Francisco Suárez"

Instituto de Derecho Canónico "San Raimundo de Peñafort" (Salamanca)

Instituto de Filosofía "Luis Vives"

Instituto de Pedagogía "San José de Calasanz"

*Departamento de Filmología

*Instituto de Derecho Internacional "Francisco de Vitoria"

Seminario de Estudios Internacionales "Jordán de Asso." (Facultad de Derecho. Universidad, Zaragoza)

Seminario de Estudios Internacionales "Alvaro Pelayo." (Facultad de Derecho. Universidad. Santiago de Compostela)

*Instituto de Sociología "Balmes."

*Instituto Nacional de Estudios Jurídicos

Centro de Estudios Económicos, Jurídicos y Sociales. (Barcelona)

Schola Lullística Maioricensis (Palma de Mallorca).

Junta de Estudios Económicos, Jurídicos y Sociales.

Consejo de Estudios de Derecho Aragonés (Zaragoza)

Instituto Jurídico Español en Roma (Roma)

Patronato "Marcelino Menéndez Pelayo"

*Instituto de Filología Clásica "Antonio de Nebrija"

Escuela de Filología (de Barcelona)

Colegio Trilingüe (de Salamanca)

*Seminario de Estudios Papirológicos

*Instituto de Filología Hispánica "Miguel de Cervantes"

*Departamento de Dialectología y Tradiciones Populares

Departamento de Geografía Lingüística y Dialectológica (Facultad de Filosofía y Letras, Universidad, Granada)

Instituto de Estudios Arabes "Miguel Asín" (San Vicente bo, Madrid)

Escuela de Estudios Arabes de Granada (Granada)

*Instituto de Estudios Hebráicos y Oriente Próximo "Benito Arias Montano"

Escuela de Estudios Hebráicos y Oriente Próximo de Barcelona (Barcelona)

*Seminario Filológico "Cardenal Cisneros"

*Instituto de Historia "Jerónimo Zurita"

*Escuela de Estudios Medievales

*Escuela de Historia Moderna

*Instituto de Historia Hispanoamericana "Gonzalo Fernández de Oviedo."

Escuela de Estudios Hispanoamericanos de Sevilla (Sevilla)

Instituto Histórico de la Marina (Museo Naval, Madrid)

Instituto de Historia Eclesiástica "Padre Enrique Flórez"

Departamento de Misionología Española.

*Instituto de Arte "Diego Velázquez"

*Instituto Español de Arqueología "Rodrigo Caro"

Instituto de Numismática "Antonio Agustín"

Instituto Español de Prehistoria

Escuela Española de Historia y Arqueología de Roma (Roma)
Instituto Español de Musicología (Barcelona)
Instituto de Estudios "Padre Sarmiento" (Santiago de Compostela)
Instituto "Alfonso V. el Magnánimo" (Valencia)
Instituto "Reyes Católicos." (Facultad de Filosofía y Letras, Universidad, Granada)
Centro de Estudios e Investigación "San Isidoro" (León)
Centro de Estudios Jacobeos (Santiago de Compostela)
*Instituto "Luis de Salazar y Castro" [Corporación Española de Estudios Genealógicos, Heráldicos, Nobiliarios y Jurídicos]
Instituto Internacional de Cultura Románica (Monasterio de San Cugat del Vallés, Barcelona)
*Instituto de Estudios Sefardíes.

Patronato "Diego Saavedra Fajardo"
Instituto de Geografía "Juan Sebastián Elcano"
Departamento de Geografía Aplicada (Zaragoza)
*Instituto de Economía "Sancho de Moncada"
Instituto de Biblioteconomía "Nicolás Antonio"
Instituto de Estudios Africanos (Paseo de la Castellana 5, Madrid)
Instituto de Estudios Pirenáicos (Zaragoza)
Instituto de Estudios Hispano-Mejicanos de Investigaciones Científicas
Universidad Hispano-Americana de Santa María de la Rábida.
夏季：La Rábida (Huelva)
冬季：Universidad, Sevilla

Patronato "José María Quadrado"
Instituto de Estudios Ilerdenses (Lérida)
Institución "Fernando el Católico" (Zaragoza)
Institución "Príncipe de Viana" (Pamplona)
Real Sociedad Vascongada de Amigos del País (San Sebastián)
Junta de Cultura de Vizcaya (Bilbao)
Centro de Estudios Montañeses (Santander)
Instituto de Estudios Riojanos (Logroño)
Instituto de Estudios Asturianos (Oviedo)
Instituto de Estudios Gerundenses (Gerona)
Institución "Fernán González" (Burgos)
Sociedad Castellonense de Cultura (Castellón de la Plana)
Centro de Cultura Valenciana (Valencia)
Academia "Alfonso X. el Sabio" (Murcia)
Real Academia de Ciencias, Bellas Letras y Nobles Artes (Córdoba)
Museo Canario (Las Palmas de Gran Canaria)
Instituto de Estudios Canarios (Tenerife)
Instituto de Estudios Malagueños (Málaga)
Instituto de Estudios Turolenses (Teruel)
Instituto "Diego de Colmenares" (Segovia)
Institución "Tello Téllez de Meneses" (Palencia)
Instituto de Estudios Ibicenses (Ibiza)
Museo de Pontevedra (Pontevedra)
Instituto de Estudios Manchegos (Ciudad Real)
Instituto de Estudios Oscenses (Huesca)

Consejo de Cultura de Alava (Vitoria)
*Instituto de Estudios Madrileños
Instituto de Estudios Giennenses (Jaén)
Centro de Estudios Sorianos (Soria)
Instituto de Estudios Tarraconenses "Ramón Berenguer IV." (Tarragona)
Institución "Alonso de Madrigal" (Avila)
Casa de la Cultura de Cáceres (Cáceres)
Centro de Estudios Históricos Jerezanos (Jerez de la Frontera)
Museo Arqueológico de Linares (Linares, Jaén)

(西澤龍生)

Osaka. 大阪市南区三津寺町. Around the *Sumiyoshi* 住吉 Shrine was a group of ports, such as *Sumiyoshi-mitsu* 住吉三津, *Shikitsu* 敷津, and *Enatsu* 榎津, which formed an area of the important ports in the southern part of *Settsu* 摂津. *Gohaku* 五泊 were the prots which was established with a distance of one day's sail from the country of *Harima* 播磨 to that of *Settsu*, and we can confirm their calculated disposition by our presuming their site.

Overland stations, *Gunge* 郡家, or *Kokufu* 国府 is thought to form a nodal region by its connection with sea ports, such as the lover *Kako* River 加古川, *Sumiyoshi-gunge* 住吉郡家 and *Kojima-gunge* 児島郡家, or the outport of Kokufu国府.

Introducción a la bibliografía de la Historia de España

por

Ryusei Nishizawa
Yoshiyuki Kondo

Al componer estas páginas bajo dicho título, he tenido el doble propósito de señalar importantes raíces de la historiografía moderna de España y de contribuir al estudio de la historia española en nuestro país, presentando un rico panorama de los rasgos fundamentales de esta ciencia: los archivos, colecciones de fuentes históricas, las revistas académicas etc., en un modo general. Acerca de los trabajos monográficos en cada ramo de investigación, esperemos que el señor profesor Y. Kondo los explicase profusamente en los números siguientes. R. N.